

## 天の火をぬすんだうさぎ

ジョアンナ・トゥロートン作 山口 文生訳

これはアメリカインディアンにつたわる物語。

むかし、この地上にまだ火がなかったころ、山の上には火があった。だけど山の上には天の人が火をまもっていて、地上の動物たちに火をくれなかった。そこでいちばんかしこいうさぎが、天の火をとりに行くことになった。

「ぼくは、いくよ、天の火とりに、天の火とりに、天の火とりにさ」

それが、でかけるりゆうだからね。

(ぼくの家では、この絵本のウサギのフレーズがうけて、何かをするときはかならず3回いうようになった。)

この本にでてくる動物は、まずうさぎ、それからりす、からす、あらいくま、七面鳥、そして最後にしか。でもいちばんかしこいのはうさぎ。天の人のところにやってきたうさぎは、火のまわりをぐるぐる奇妙なおどりをしながら、天の人をうまくだまして、まんまと火を盗みだしてしまう。

童話や絵本にでてくる一番ポピュラーな動物は、たぶんおおかみとうさぎ。それから、きつねや熊やねずみたち。彼らは人間と暮らしている場所に近いところで、昔から人間の生活に深く関わっていたからだろう。おおかみは悪者で、うさぎはいつも賢くていたずらもの。とりわけこの絵本のうさぎの表情とおどりはおもしろく、何回見てもいつでも笑ってしまう。

